

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図書館報

発行 東北文教大学・東北文教大学短期大学部附属図書館 〒990-2316 山形市片谷地515 ☎023-688-7544

目次

- 図書館について、〈思い出すこと〉〈思いつくこと〉…………… 1
- 新しい学びへの対応—ラーニングコモンズとサイレントスペース… 3
- 私のおすすめ本…………… 3
- 平成28年度 図書館報告 …………… 4

図書館について、〈思い出すこと〉〈思いつくこと〉

短期大学部学部長 佐藤 晃

つきなみな始まりだが、図書館との出会いはいつころだったかと思いを巡らせてみると、やはり小学校の図書室ということになる。たぶん、「読書の時間」とかがあったのだと思う。記憶に残っている図書はほとんどないのだが、唯一、東北の伝説をまとめた本を読んだことは憶えている。八幡太郎義家という武将の活躍を記したものが集められていたように思う。八幡太郎義家とは、源義家のことで、11世紀後半に起きた前九年・後三年の合戦という東北地方を舞台にしたいくさで勝利した源氏の武将である。

この二つの合戦では、東北に住むエミシと呼ばれた人々やその血を引く人々が巻き込まれた。そして、合戦終結後に平泉に独自の政権を創り上げたのが、奥州藤原氏だということは、その時の読書ではまだ知る由もなかった。

ただ、エミシと呼ばれる人々がアイヌの人々につながる、東北・北海道の先住民の人々であることは知っていた。私の郷里は北海道函館市で、小学校の授業の中に先住民であるアイヌのことは触れられていたし、親や祖母などからもアイヌのことをわずかだが耳にすることはあったからだ。

そのことがあってかどうかはわからないが、大学に入って、専攻を決めるにあたって、国史（と当時は言っていたが、今は日本史）を専攻しよう、そして漠然とアイヌのことを研究してみようか、などと思っていた。そのころ、つまりは大学1年生の時だったと思うが、大学キャンパス内の学生会館という建物の中にある学生食堂でだと思うが、なぜかアメリカから来ている留学生と話をすることがあった。私と同じく国史

専攻を希望する友人が、紹介してくれて食事をしながら雑談をしたのだと記憶している。そのアメリカ人留学生は、若い研究者か大学院生という感じで日本語が流暢だったが、それもそのはずで日本史の研究をしているということだった。

さてそこで、私はかねてから疑問に思っていたことを彼に尋ねた。

「アメリカでは、先住民（当時はインディアンと言っていたが、今はネイティブ・アメリカン）の研究はどのくらい行われているのか」

もちろん、アイヌの研究のことを意識しての質問のつもりだった。彼はこう答えた。

「先住民の研究をする人は少ない。なぜなら、研究費が付かないからだ」

大学1年生に「研究費」とやらが何なのかはわかっていなかったが、要するに研究を支援するのに好意的とはいえない環境だということだろうくらいはわかった。つまり、私はその時、学問の政治性というものに出会ってしまったのだ。何だか言いようのない気持ちになって、私はそのあと言葉が出なくなってしまった。

大学時代に知的なショックを受けるような授業に出会ったことはなかった。自分の専攻を決める段階になって、結局、国史専攻をやめたのは、国史関連の授業に興味を持てなかった、そのため勉強もしなかった、その結果成績も不良で専攻希望もかないそうになったからだった。自分の不勉強を棚に上げて、授業のつまらなさのせいにするようで、今大学教員となった身としては何ともお粗末な限りだが、しかし、学生食堂で出会ったアメリカ人留学生との会話は、少な

らぬ刺激を受ける体験だったと思っている。

国史専攻をあきらめて、消去法で選んだのが国文学（今は、日本文学）専攻だった。そして、3年生の時に、指導していただいていた先生の研究に影響を受けて大学院進学を決意して、4年生の1年間は、受験勉強と卒論作成に費やした。その1年間は、ほとんど下宿と大学の図書館を往復する日々で、図書館には、毎日昼ごろから閉館時間だった20時30分までいたと思う。大学図書館というところを本当にありがたく感じた。

さて、その後、まがりなりにも国文学の研究者らしき者になって、十数年がたった時期に、あるきっかけから、それまで取り組んだことのないテーマで論文を書くことになった。それが東北・北海道の先住民に関連するものだった。詳しいことは省略するが、きっかけは、津軽安藤氏（安東氏とも書く）と呼ばれる海の武士団の歴史に触れる機会があったことだった。津軽安藤氏とは、平泉の奥州藤原氏が源頼朝によって滅ぼされた後、今の津軽半島の^{じゅうさんこ}十三湖（かつては十三湊と書いて「とさみなと」と呼んでいた）を拠点として北方地域の物資がもたらす富を手手にこの地に蟠^{ばんきよ}踞^{じよ}していた武士団である。後に安藤氏は秋田に移り江戸時代には秋田氏を名乗って、さらに福島^{ふくしま}の三春地方に移って三春秋田家として幕末まで生き延びる。

この安藤氏がユニークなのは、自らの出自を記した系図にエミシの祖と位置づけられる者を組み込んでいることだ。つまり、自分たちは東北の先住民の末裔であるとしているのである。これがどれほど驚くべきことかは、日本史の教科書を読んだだけではわからない。鎌倉幕府以降、江戸幕府まで続く武士による政権が代々、「征夷大將軍」を政権の統率者に頂く、いわば軍事政権だったことの意味とともによくよく知っておくべきことだったのだ。この論文を書いた時に私はそれを痛感した。なぜなら、私が育った郷里・北海道とは、そうした歴史の延長上に作られた近代日本国家の最初の「外地」だったのだから。（ちなみに子どものころ、北海道弁で本州のことを「内地」と呼ぶのを不思議に思っていたが、その語の意味をこのときになって初めて理解した）

思えば、小学生の時に図書室で読んだ八幡太郎義家の伝説とは、エミシを中央からやってきた武士が制圧して行く、その歴史をもとにできたものだった。ここから同じ源氏の子孫と自認する源頼朝が奥州藤原氏というエミシ＝夷を征伐して、「〈征夷〉大將軍」となり、以後六百数十年以上続く武家政権がその成り立ち、統治の原型を確立する…義家の伝説は、そういう歴史の始まり＝根源を語る／騙るものでもあったのだ。子ども向けの英雄伝説が、武力による支配の正当性を騙るものに反転してしまったのだ。

そして、大学1年生の時の対話、今にして思えば、あのアメリカ人留学生の言ったことは本当だったのか、本来なら確かめるべきところなのだが、その当時の私にはその術もなく、ショックとともに鵜呑みにしてしまうしかなかった。だが、あの時、もし漠然とし

た気分の中でアイヌ研究を志していたならどうなっただろうと思う。後に安藤氏関連の論文を作成する過程で出会った多くのエミシ研究、アイヌ研究の著述に触れ、そこに含まれるある種の強靱な意識、中央の歴史を相対化して、新たな現代の知見に変えていこうという研究にしばしば感銘を受けたことを思うと、あの時の学生食堂の対話は貴重な体験だったのかと思う。

ついでに言えば、かつての大学キャンパス内には、そういう自然発生的な対話ができる場が食堂くらいしかなかったのかもしれない。私のいた大学では、学生会館という建物があって、食堂以外にもミーティングができるような会議室ふうの部屋や、休憩スペースのようなものがあつたように記憶しているが、いったい学生たちはどこでそんな対話をしていたのだろうか。そもそも当時は授業が対話的なものではなく、したがって教室も対話型に対応できる仕様になっていなかった。だから、学生同士、または教員を交えての自然発生的、あるいは自主的な対話の場を大学キャンパス内に求める気分になれなかったのだろうと推測する。大学キャンパスという入れ物は対話に適さない、それがかつての大学だった。（それ故、といっでは何だが、学外に学生の溜まり場があつたのかもしれない）

だから、授業が対話を重視し、教室の仕様がそれを支え、学生が対話する知恵に気付き、協調することの本当の意味を知る、そして、そういう対話の場が教室以外にも広げられていけば、たぶん、いわゆるラーニングコモンズの実現に結びつくのではないか。

話を戻そう。

図書館は、多種多様な本の貯蔵庫であり、新しい知の発見の源となる出会いの場だと思う。しかし、そこに広い意味での「政治性」が作用しないとは言えない。戦争の悲惨さなどを描いたある種の本が、子どもへの影響を考慮すべきとの理由づけによって公共の図書館で閲覧制限を求められたりするようなケースはわかりやすすぎる例かと思うが、そのようなケースではなくとも、図書の選択には、さまざまにバイアスがかかることがあるだろう。

大学図書館の場合、学生の利用を中心に考えた図書の選択と、教員の研究に関わっての研究書などが収容されるべきものだろう。そして、図書の選択・購入には教員も大きな責任を負う。今、そしてこれからの社会において、忘れられてはならないこと／もの、見逃されがちなこと／もの、授業には直接関係はしていないかもしれないが、目を向けてほしいこと／ものを、本を通じて提示できる場が図書館なのではないか。

「図書館で見た、あの本のタイトルにあつた言葉が気になって…」というところから、誰かと誰かの対話が始まり、できれば教員もそこに混ざって、「それじゃあ、ちょっとお互い調べてみてから、また話し合おうか」、などという場ができれば、たとえ数値的には図書館の利用者増にならなくとも、大学図書館の役割は大いに果たしている、と私は思うのだが、いかがだろうか。

新しい学びへの対応ーラーニングコモンズとサイレントスペース

文献やパソコンなど電子情報を活用しながら、ディスカッションやグループ学習ができる、いわゆるラーニングコモンズの設備を、図書館に設置しました。1階にグループ学習エリアとリラクゼーションスペース、2階にブラウジングスペースを設け、1階に視聴覚スペースを設置しました。文献と情報機器をフルに活用し、知識を応用し、発信する力を身に付ける共同で学習できるスペースです。備え付けのホワイトボードなどは自由に使用できますし、机やいすの移動も可能です。また、インターネット接続やパワーポイント機能も備えたパソコンやプレゼンテーション用のプロジェクターもカウンターで貸し出します。どうぞ積極的に活用し、アクティブな学習にチャレンジしてください。

そして、静かに読書したり思索するのも図書館の大事な役割です。静かに個人で学習できる個人学習・シンキングスペースを1・2階に設置してあります。1階は参考図書が近くにありまので調べものの向きです。2階は、一人一人の仕切りを置き、じっくりと読書したり思索するのに向いています。

アクティブな学習のスペースと静かに学習できるスペースがありますので、両方の機能を活用できるよう、ご協力ください。

また、利用する方々の利便性を考え、2階からも図書館の出入りができるようにしました。ただし、図書の貸し出し・返却は今までどおり、1階カウンターで手続きをしてください。2階から図書などを持ち出しますと、ブックディテクションシステムが作動し、警報がなりますのでご注意ください。そして、利用状況の把握のため、2階から入館する際にも所属学科のプレートをお持ちください。ご協力よろしくお願いします。



図書館学生アルバイトの「私のおすすめ本」

軽部菜々子（総合文化学科1年）

『I Love Youの訳し方』 望月竜馬 著 雷鳥社 2016.12 (904/モチ 1F 一般書架)

小説家・夏目漱石は、かつて英語教師をしていました。ある日生徒が「I Love You」を「我君を愛す」と訳したことに対し、「日本人はそんな台詞を言わない。『月が綺麗ですね』とでもしておきなさい。それで伝わるものだ」と言ったという有名な話があります。同じく小説家の二葉亭四迷は、これを「死んでもいいわ」と訳したともいわれています。想いを伝えるのに、決まった言葉はありません。日々言葉と向き合う作家たちは、どんな言葉で愛を伝えようとしたのでしょうか。

この本は、100人の作家の小説や詩、作家自身の手紙などから「情熱的に」「感傷的に」「個性的に」「狂氣的に」「浪漫的に」表現した、100通りの「I Love You」を紹介しています。日本の文豪の作品からはもちろん、海外の作家や今人気の作家の言葉も取り上げられています。

皆さんの好きな作家や、読んだことのある作品も登場するかもしれません。美しい言葉と優しいイラストに癒されたい方にもおすすめです。ぜひあなたのお気に入りの訳し方を探してみてください。



鈴木 耀太（総合文化学科1年）

『硝子のハンマー』 貴志祐介 著 角川書店 2007.10 (913.6/キシ 1F 一般書架)

「鍵のかかった部屋」というドラマを知っていますか？

この本はそのドラマの原作である「防犯探偵・榎本シリーズ」の第1作で、ドラマでは、最終回として前編、後編に分けて放送されました。

このシリーズでは、普通の推理小説のように、探偵が事件を解決するという方法とは少し違い、防犯ショップの店長である榎本径が、弁護士の青砥純子に依頼され、数々の密室事件を解決していくという方法で物語が進行していきます。

この「硝子のハンマー」では、この二人の視点がメインとなっている第1部と、事件の犯人の視点から語られる第二部の二部構成になっており、この独特な構成は普通の推理小説とは全く違った面白さがあります。

ドラマとは違った雰囲気のある登場人物たち。そして、更に濃密な内容は、ドラマを見た人でも、見ていない人でも楽しめます。わたしはこの本を自信を持ってお勧めします。

この本以外の防犯探偵シリーズ「狐火の家」「鍵のかかった部屋」の2冊も面白いので是非読んでみてください。



笹川 瑞月（総合文化学科1年）

『世界で一番美しい色彩図鑑』 ジョアン・エクスタット/アリエル・エクスタット 著 赤尾秀子 訳 創元社 2015.5 (757.3/エウ 2F 一般書架)

空の青、草の緑、バラの赤のように私たちの身の回りには様々な色であふれています。そんな色とその役割、しくみがどのようにして私たちに関係しているかが書かれたのがこの図鑑です。

皆さんは「なぜ空は青いのか？」と一度くらいは思ったことがありますよね。実はそこには大気中に含まれる微粒子が関係していたことを知っていましたか？それがあることによって空はオレンジにも赤にもピンクにも変わります。

また、著者は肖像画の人の顔の色にも注目してこんなことを述べています。高貴な人は色白に描かれているそうなのです。イギリスのエリザベス1世（1600年ごろに描かれたもの）がそうで、まるで陶器のように顔に白が塗りたくられています。逆に悪魔のような顔にするときには、邪悪そうに見えるように赤を使うそうです。

このように色のしくみやどうしてそこにその色が使われているかなどを知るにはぴったりな本となっています。使われている写真もとても綺麗なものでぜひ手に取ってみてください！



上記の図書は図書館で所蔵しています。ぜひご利用ください。

平成28年度 図書館報告

(東北文教大学・東北文教大学短期大学部)

資料の構成

(平成29年 3月31日現在)

1. 図 書	蔵書数	123,366冊
	年間受入冊数	980冊
2. 雑 誌	所蔵学術雑誌種数	(和 127種, 洋 168種 41種)
	年間受入雑誌種数	(和 142種, 洋 151種 9種)
3. そ の 他	新聞	(和 14種, 洋 17種 3種)
	視聴覚資料	所蔵数 1,136点
	データベース	Academic Search Elite, PsycINFO, 聞蔵, 河北新報データベース Magazine Plus, CiNii (サイニー)

利用状況

年間入館者数	23,937人
学外者の年間入館者数	447人
CiNii (サイニー) 検索数	16,201件

年間館外貸出冊数	4,448冊
開館日数	251日

貴重図書の紹介

『絵本通俗三国志』

(天保7-12 (1836-41) 年 いけだとうりてい 池田東籬亭 著・かつしかたいと 葛飾戴斗 画)

三国志と聞くと、皆さん劉備や曹操、諸葛孔明など様々な登場人物を思い浮かべるのではないのでしょうか。今回紹介する『絵本通俗三国志』は、三国志の物語が国や時代を超え、現代の私達まで愛され続ける原点となった作品です。

三国志の舞台は、今から約1800年前の古代中国、後漢末 (220年頃) から魏・呉・蜀の三国が鼎立した動乱期を経て、西晋 (265-316) が再び国家統一するまでの時代。中国では正史『三国志』に基づきつつ、羅貫中による時代小説『三国志演義』が明代初頭 (14世紀末頃) に書かれました。

日本では、京都の僧侶・湖南文山による『三国志演義』を翻訳した『通俗三国志』が、元禄2-5 (1689-92) 年に刊行され、知識人の間で読まれました。その後、江戸時代後期の天保7-12 (1836-41) 年に、漢字片仮名交じり文で書かれた『通俗三国志』の文章を漢字平仮名交じり文で表記し、かつ総ルビ・挿絵を付した『絵本通俗三国志』が刊行されると、広く庶民にまで普及し、いわば日本初の三国志ブームが巻き起こりました。

このブームの一番の原動力となったのが、かつしかたいと 葛飾戴斗



の描いた400点にのぼる挿絵です。かつしかほくさい 葛飾北斎の高弟とされるたいと 戴斗の描く画は、細密でありながら躍動感にあふれており、現代の漫画にも通じるような大胆な構図が取り入れられています。

当館では、江戸時代に出版された『絵本通俗三国志』8編75冊を全て欠本なく所蔵しています。図書館では、この秋に葛飾戴斗の挿絵にクローズアップした展示を予定しておりますので、この機会にぜひ皆さんも三国志の物語の世界に触れてみてください。

